

---

# 紅の瞳

しらお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅の瞳

### 【Nコード】

N7723S

### 【作者名】

しらお

### 【あらすじ】

琉華りゅうかは、大学の門で呼び止められ、振り向いた。視線の先には、美少年。彼は、紅の瞳を細めて言った。

「お前、俺のものになれ」

龍に妖怪に神様が現れる現代ファンタジー。

夢の中、二つの声が響く。

薄ぼんやりとした光が廊下の先から漏れてくる。カツン、と同じリズムで響く足音。光に照らされ浮かび上がったのは、凜とした面立ちをした初老の女性。厳しい表情の彼女は、目の前まで扉が迫ったことに気付いて、優美な動作で礼をとった。

ほんの少しばかり経って響いた石畳を叩く硬質の音に、彼女は光へ足を踏み出した。

そこは、小さな火が支えもなくひとつふたつ浮かぶばかりの部屋。部屋の隅まで照らさない明かりの下でこの場所が実際どれくらい広いのかは分からなかった。

「陽王<sup>ひのきみ</sup>、決心はついたかな」

澄んだ鈴の音が何重にも聞こえるような声がほわりと広がる。主の美声に彼女は無表情に緊迫感を漂わせた。

「あれを、目覚めさせましょう」

主の白い面に三日月の赤が開かれた。

本日は晴天ですが。

北大学人文学部。就職難にあえぐ中でももつとも職にありつけな  
いと言える学部だ。

昨今では、資格を身に着けようがアピールをがんばろうが、本当  
に必要な人間と判断されなければ採用されない。

就職氷河期という文字が脳裏をよぎり、琉華は苦笑した。いや、  
どちらかというとき泣き笑いに近い。それと言うのも、手の中で光る  
端末が原因だ。

「また、ダメか…」

画面には、この間面接を受けた会社からのメールが映されていた。  
残念ながら、と始まり、最終的には、うまくいくように祈っていたま  
すと述べられた、俗に言うお祈りメールである。それなりの感觸を  
掴んでいたと感じていた分、今回の失敗はなかなかきつかった。

ふと、手元の端末が光り震える。慌てて操作すれば、発信者の欄に  
懐かしい名前があり、嬉しそうにボタンを押した。

親友と飲んで楽しい気分のまま帰路に着いた琉華は、目の前にそ  
びえるそれを眺め、これが酔うということかと若干ずれた感性で感  
心していた。ワクワクと言われるほど飲める彼女にとって酔っぱらうと  
いうことはほとんどなかったので、少々新鮮に思ったのだ。

彼女の視線の先には、小山ほどもある巨大な猿のような動物が、  
どこかの民家の上で踊っている。腰をふり、腕をぶんぶん振り回す

滑稽なそれ。あんなところで踊り続けられたら、音が響いて下に住む人々はいい迷惑だろう。そのくらいにしか思わなかった。だから、気付かなかった。こちら目かけ、何かが飛んでくるという非常事態に。

およそ日常では聞かない物音が、背後で起こり、琉華は、慌てて振り返った。そして、息をのむ。

人が瓦礫の中で転がっている。それも十歳程度の子供だ。先ほどの轟音で壊れたらしい塀の一部。子供の背中に大きな塊が乗り、大小様々なコンクリートの塊が散らばっている。子供は、動かない。これは、なんだ。麻痺した頭でようやく救急車を呼ぶことに思い至ると、鞆に手をつ込む。だが、鞆に目を向ける、その視界の端にとらえた影に、携帯を握ったまま、視線を戻した。

「てめえ、よくもやりやがったな……」

獰猛な、獣の声で子供は、少年は確かにそう言って立ち上がったのだ。子供の力では、到底持ち上げられなさそうな塊をやすやすと振り落して。

「っー！」

持っていた携帯が、滑り落ちた。音に反応して少年がこちらを見る。赤色。血と同じように濃厚な紅。電灯の光が乱反射して、宝石のように濃淡を煌めかせたそれは、彼の眼。

ヒュン、耳にした鋭い音。眼で確認するより早く視界を黒が覆った。

本日は晴天ですが。(後書き)

酒に強い人って、ワク、ザル、蟒蛇とかありますけど、どれが一番飲めるんでしょうね。

なんでそんなに上からなんですか。

「ルー、卒論どこまで進んだ？」

「ぜんぜん。テーマ決めて、方法決めたままではよかつたんだけど」

「明日も部活かあ」

「休みたいねえ」

「これからバイトだから、またね！」

「明日は遊ぼうね」

回りで姦しく響く雑音を意識の外に追い出し、琉華<sup>ルキ</sup>は、卒論で使う文献を手に帰路に着く。友達と大学敷地内中ほどで別れ、南門を目指した。ふいに、いつものざわめきとは違う雰囲気を感じ取る。どこか浮かれたようなそれに惹かれ、周りの学生たちが興味津々で見つめる一点を見た。

壁にもたれた一人の少年。それも十歳程度の年齢で、小学生らしくシンプルな服装をしている。だが、彼は子供らしいはずの服装で子供のように思えなかった。顔が整いすぎているのだ。ウルファットを施した黒髪、色白だが健康的な肌、目を伏せた彼の表情は大人びていて、それも子供というには躊躇<sup>ちゆうじゆ</sup>われるものだった。

綺麗な少年だ。ほう、と知らずため息をついたとき。

弾かれるように少年が動いた。交わされる視線。それに息をのむ暇も与えず、彼は行動した。軽やかな音さえ立てて、跳躍するルーを含めた学生たちの眼に捉えられないほどの速さで、間をすり抜ける。その動きは、機敏な狩人のようだ。

赫。燃え盛る炎、または閃光のように、その色が目の前に現れて

ようやく我に返る琉華。少年が自分を見上げていた。再度、眼があったと感じたと同時に、少年は傲岸不遜で獰猛な笑みを浮かべる。

「お前、俺のモノになれ」

それが、少年と彼女が交わした初めての言葉だった。

目の前には、先程紹介された神主の男性が座っている。異性とはあまり話さないタイプのルーにとって緊張するしかない場面だろう。

「そんなに緊張しないでください」

涼やかな声で琥珀の髪を揺らした彼の名前は、さかきはら たつき榊原樹。琉華がいるここ、双玲神社の主だ。自己紹介のときに言っていた年齢に疑問が生まれるぐらい若々しい彼の口では、ペロペロキャンディーがこころ楽しいげに踊っている。和服だが、現代風に整った顔立ちに無表情でキャンディーをほおばる姿は、なんだか不気味で奇妙に思われた。

ふいに、眼があつて、彼は、にこりと微笑む。無表情の冷淡な雰囲気から一転して、柔らかく優しい笑顔。頬に熱を感じ、思わず顔をそむけた先には、不機嫌そうな美少年がいた。恥ずかしさから咄嗟にとつてしまった行動を咎められているようで、居心地が悪い。

「炎瑯、睨まない」



呆れたように諭されて、エンロウ、と呼ばれた少年は舌打ちをして視線を外した。どこまでも不機嫌で、それを隠そうともしない。私は、君に呼ばれて来たんだけど。明らかに歓迎していない雰囲気、眉間に皺がよった。

「どうやら、きちんと話してもないようだね」

「ごめんね、と神主が謝る。苦笑したイケメンに、彼女は動揺しつつも、もごもごと気にしていないことを告げた。

「さて、本題に入ろう」

一拍の間。

「まず、彼の名前を教えてください」

はい？ 彼女の頭に疑問符が浮かんだのは、言うまでもない。

なんでそんなに上からなんですか。(後書き)

次の話は、説明になりそう。あ、お気に入りしてくださった方、ありがとうございます。

平凡にはきついですが、これ。(前)

「え、と…？ 名前、ですか？」

「そう。君ならわかるだろうからね」

自信に満ちた表情で琥珀の瞳を細め、彼は言う。否定しようとした言葉は、彼に遮られてしまった。

「さつき呼んでいたのは、彼の名前ではなく役職。名前がないのは、とても不便なんだよ」

そこまで言うと、さあどうぞとルーの眼を見つめてくる。隣的美少年も、彼女の口元を見るだけで、口を開こうともしない。数分待っても何も変わらない状況に諦めて、彼女は、少年を見てふっと浮かんだ適当な言葉を口にした。

「真、<sup>まこと</sup>でございすか」

まっすぐな紅の光を思い出す。自分の心の中まで見通してしまいそうなの、強い炎の光。

「真…いい名だね」

神主は嬉しそうに美少年に呼びかける。彼は、自分の名前となった言葉を口の中で反芻し感触を確かめていた。しばらくして、満足そうに。

「ああ、気に入った」

そうか、それならよかった。何か重要な会議が無事に終了したかのような雰囲気、ほつと一息つく。そして、気付いた。彼が、ル―を無理やりこの神社まで連れてきた理由、また、いきなり名付けしろと言ってきた理由、なぜか納得した彼らについて、何も聞いてないことを。

「…今日は、朔だったか」

が、喉元まで出かかった言葉は、隣の美少年が立ち上がることで引っ込んでしまった。

「あー、うん。しばらく頼むよ？」  
「構わん」

妙な緊迫感をもった会話。真が自信に満ち溢れた笑顔で返事をした直後のことだった。

ドゴオツ

轟音が響いた。それも、至極近距離で。思わず閉じていた目を開けば、目の前に漆黒の髪がふわりと広がり、揺らめく姿が目に入った。先をたどれば、真が立っている。さらに、その先には巨大な手が、彼を覆うように広がっていた。

『ナンダ、モウ契約済ミカア？』

聞こえた野太い声は、その手の先から発せられていた。手の先、巨大で醜悪な猿の顔から。

「ひっ」

なにこれ。猿…？ でも大きすぎる。それに真っ青の毛並を持つ

た猿なんて聞いたこともない。それに、なんて毒々しい色をした目だろう。死んで濁った沼に沈んで腐ってしまった魚の眼のよう。自身に向けられているのは、獲物を見る目だ。人間がついぞ向けられたことのない、天敵が持つ恐怖の光。

思考が目の前 of 巨大な生き物の姿でもって埋め尽くされたときに、響いたのは、力強いボーイソプラノだった。

「おいお前！ 立て、抑えきれん！」

ハッと我に返って、彼女を庇うように化け物の指を両手、肘を使い抑え込んでいる少年に目を向ける。どれだけの負荷がかかっているのか震える腕。次に見た、流れる黒髪の間隙から覗き見る鋭い紅の光に、慌てて腰をあげる。

「さかしろ逆代さんっ！」

恐怖で上手く立ち上がれない彼女の手をつかんで、榊原が引つ張った。広い胸に抱き留められたルーの後ろで轟音が立ち上る。部屋の隅へ、さらに次の部屋へ。ちらと後ろを見れば、化け物の手が、地面にめりこんでいた。あんなのに捕まったら。ぞっと背筋に寒気が通り抜ける。

気付けば、物置らしき場所で、周りには水が二人を囲むように撒かれていた。なんでこんなことするんだろう。こんなもので、あの化け物が防げるのか。もし、襲われたらひとたまりもないのでは。

「大丈夫。仕組みは言っても理解できないだろうから省くけど、この中に入れば入ってこれない」

力強い言葉、合わせた視線は、真摯で嘘を言っているようには思えない。それに落ち着いた彼の様子は、信用がおけた。

「…ごめんね。いきなりあんなのが来てびっくりしたよね」

無言で頷く。そうすると、彼は頭を撫でた。よしよしと幼い子供にするように。顔に似合わず、大きく無骨な手は、ほとんど覚えていない亡くなった父親のようで。彼は、守ってくれる存在だと。頼っていいのだと。

ほ、と息をつけた。

「落ち着いたかな」

「…はい」

「よし、それじゃここで待ってよう」

「…あの、あれはなんなんですか」

あの、化け物としか言いようがない巨大な猿。人を捻りつぶせそうな大きな手が傍若無人な力を発揮して、壁を床を破壊していった姿。

「狒々ひびという、妖怪だ」

「ようかい…って、そんな生き物が」

「いる」

視なくなっただけ。科学という言葉が魔法にとって代わったあたりから、人間は妖怪たちを視ようとしなくなっていくた。すぐ隣に

存在する異世界を認めなくなった。そして、一部だけが視る眼を持ち続け、それらは霊能力者と呼ばれている。

「存在は、しているんだ。ただ、視ないだけ」

「…私が、今、視えるのは…？」

突拍子もない説明は、今までの価値観を考えれば到底信じることはできない。自身は視ない人間だった。その矛盾に説明を貰わなければ、納得できない。いや、貰えれば、信用できるようになれる気がした。

「簡単なことだよ。認識されていなかったことが認識され、視るようになってただけ」

視点と同じだよ。空を見上げれば地面は見えない。地面を見れば空は見えない。ただ、認識しているから、視点を切り替えて両方を見ることが出来る。今までは、空しか知らなかったから視点を切り替えるなんて思いもしなかったんだ。

そう続けられた言葉は、分かりやすく頭に入ってきて、すんと胸の中に落ちた。

「よし、これで認識できたね」

満足げにそう言うと彼は懐から古紙を取り出す。ふたつに折り畳まれただけのそれを広げれば、草書で書かれた文字が並んでいた。あまりにすらすらと書かれていて日本語に見えない。

「逆代さん、真のことだけど。たぶん、もう保たない」

保たない？ 突然の言葉に視線が切羽詰まった表情の榊原へ移る。

「あれは、諦めが悪いからね。今までのやり方では倒せないどころか、疲れたところで殺される」

コロサレル。物騒な単語に、あれの腕を抑えていたときに彼の細腕が震えて玉のような汗が流れていた映像が脳裏をよぎる。

「だから、今から言う言葉を復唱して」

ルーが頷く姿を見ると、彼は手元の古紙に目を落として言葉を紡ぎ出した。

『我は、彼らと共に在る者なり。古の盟約に基づき、管理者・龍樹たつきより操龍者・竜歌りゅうかへ契約を譲る』

榊原の口から出てきたのは、全く知らない言語。中国語のように発音が複雑で、力強い声。それに引きずられるように、ルーは同じ言葉を口にした。

『彼の者は、陰火いんかの一族。社の長ち、勝先しょうせん。準飯じゅんがを』

止められた言葉に戸惑う暇もなく、勝手に唇が動く。

「ラ・レウオン・フリウド・グーハ・クーフア」

知らない名前を紡いだ。



平凡にはきついですが、これ。(前)(後書き)

長くなりましたので途中でくぎりました。話としては続きます。説明って難しいですねえ。どこか矛盾点などございましたら、指摘してくださいとうれしいです。

平凡にはきついですが、これ。(後)

豪腕が唸りをあげ、体ぎりぎりのところを通過していく。それでも、風圧に押され、体勢が崩れかけ慌てて跳んだ。拳は、恐ろしい速度で真を叩き潰そうと執拗に弱点を狙う。途中、手にした日本刀を盾に狙いをずらす。普段より軽い体は、思った以上に吹っ飛んだ。

「ぐ…っ！」

したたかに背中をぶつけ、たわんだ幹から滑り落ちる。回避行動に移りたくても、目眩に吐き気がして力が入らなかつた。

『貴様、竜ダロウ』

嘲りを含んだ濁声が頭上から響き、喉に圧迫感を覚え、つんとした獣臭さが鼻をつく。

竜。狒々が口にしたそれは、全ての妖怪を下すほどの力を持つ神のような獣。人がすでに忘れ去って久しいその存在は、彼らにとつては未だに脅威であつた。

『ソレニシテハ弱い。マダ子供力』

ぐ、と持ち上げられ、締まる首に全体重がかけられる。本性は違えど、今は人の体。パートナーのいない彼の体の強度は人と同じだつた。

『竜ノ傍ニ在ル者モ旨イガ、仔竜モ美味ト聞ク』

本来強者である竜を下し、その肉を喰むという心地よさに下品な

笑い声をあげ、狒々は手に力を込めた。徐々に締められていく首に、意識が朦朧としてくる。

契約さえあれば。

十年探し求め、ようやく出会えた相棒を目の前に、自分は終わるのか。

契約さえあれば。

大切な居場所を荒らされたまま、終わるのか。

契約さえあれば。

こんな下等の狒々なんぞに一族を貶されたままなのか。

契約さえ、あれば。

ようやく名を貰えたのに。あそこから抜け出せるといふのに。あの目から逃れられるはずなのに。

契約さえ。

変化は一瞬だった。

『グウツ！？』

狒々は苦悶の声をあげ、跳びすさる。竜を捉えていた手には、上腕部まで届く三筋の裂傷が走っていた。遅れて血が迸り、狒々は痛みのにた打つ。

「思った以上に弱えなア…まあ、まだ守歌もりうたがないしな」

響いたのは、少年の高い声ではなく、魅惑的な成人男性の声。嬉しそうにくすくすと嗤わらい、狒々を睨む赫あざが煌々と輝いていた。

そして、狒々は目にする。圧倒的な存在感を放つ、雄々しき竜の姿を。

一瞬の揺れと怒号を境に、急に静まり返った外。ルーは、不安そうに庭の方面の壁を見つめる。あれほど小さな背中が、巨大な猿を相手取っているのだ。最悪の事態しか思い浮かばない。しかし、隣の神主は悠然と構えていた。知り合って間もないルーには、わからない信頼があるのだろうか。

「あ、あの…」

彼は、器用に片方の眉を持ち上げ、続きを促す。

「大丈夫、なんですか…？」

これをすれば助けられるから。そんな風に言われて儀式みたいなあれを行ったものの、目に見える効果がまったくないこの状態では、実際どんなものなのか実感できない。

「そうだね。もう大丈夫だろうか、そろそろ行くこつ」

そう言われ、おとなしくついていった先には、とんでもない光景が広がっていた。

巨大な猿の遺骸が転がっていた。死んでいるとすぐにわかったのは、首筋にざっくりと傷が開かれており、それは、首がほとんど皮一枚でつながっているような状態だったからだ。すぐに視線をずらした先に、彼女は感嘆の溜息をもらす。

猿の背中に堂々と立つ、見知らぬ男。長い黒髪が、夜風に揺られ舞い上がる。むき出しの背中では、不要な脂肪や筋肉をそぎ落とし、しなやかな猛獣を思わせる。腰に巻かれた黒い布は、どこか見覚えがあった。ふと、視線を感じたらしい、男がこちらを向く。

「え、真…?」

赤い、赤い目がルーを捉える。その瞬間に自身の口から洩れた言葉に、自分で驚いた。だが、自然とこの男があの子と確信している。ひよいと跳んだ彼は、二人の目の前に降り立つと、自信に満ちた声で言った。

「終わったぜ」

いったい、私はなにに巻き込まれているのだろう。少年から一気に成長した彼の姿に、呆然とそう感じた。

「真が、竜?」

改めて、説明を受けているルーは、目の前の青年二人に胡乱げな顔を向けた。昨日は、騒ぎが収まったのが深夜だったため、親に断りのメールを入れておいて、神社近くの神主自宅へ一泊したのだ。

「んだよ、認めてねえじゃん」

それに、すぐさま反応を返したのは、黒髪赫目の美丈夫。先日まで美少年だった男だ。今では、幼く丸みを帯びていたフェイスライオンが鋭く武骨な成人男性そのものとなっている。不満そうにテールに頬杖をつくその手も大きく、少年らしさは残っていない。

「まあ、一夜明ければ夢だと思うのも無理ないよねえ」

対する答えを出したのは、茶髪茶目の神主。自宅だからか、神主の衣装ではなく渋い色合いの着流しだ。口元には、体に悪そうな色をした棒付きキャンディがごろごろとしている。出会った当初から思っていたが、どうにもそれが和の衣装とちぐはぐだ。

「さすがに、あれを夢とは思いませんよ」

あれだけ実感を伴った悪夢はあってほしくない。それよりも、化け物が存在することは認めしたが、それが目の前の青年がその化け物に類するものだというのが信じられないだけだ。化け物らしい化け物のイメージしかないルーにとっては、当然と言える。

「まいったな。見せろと言われて見せられるものじゃないし」

話を詳しく聞けば、竜というのは、異世界からやってくるものらしく、ここにいる間は、本性に戻れないらしい。ただし、それはパートナーがいない場合だ。

「パートナーと言っても、きちんとした契約を結んだ場合ね」

神主の榊原が言うには、契約は、三段階あるものだという。だが、今のルーと真の契約は、第一段階をようやく済ませたばかりだ。

隣接し重なっている異世界の存在を認め、竜の関係者から躁竜者として指名を受け、躁竜者が竜の名を呼びかける。そして、竜からの応えがあつて初めて成立するのだ。

「あの、昨日から思ってたんですけど、躁竜者リネリアってなんですか？」

説明してなかったっけ。そんな前置きをして、榊原はしっかりと伝えてくれた。躁竜者とは、躁竜の術を持つ者：いわゆるパートナーとなる存在のこと。さまざまな方法で、竜の力を抑え、増幅させ、制御する。

「そして、竜にとって比翼連理の相手だ」

比翼連理。理想の恋人。運命の相手。そんな単語が脳裏をよぎる。そうして、思い出したのは、昨日彼に言われた一言だ。

「俺のモノになれ」

という、傲慢極まりないセリフを。

平凡にはきついですが、これ。(後)(後書き)

一応、この話はこれで終わりです。むずかしいですね、一気に説明しちゃうと絶対覚えられないし。かと言ってある程度は書いておかないと次が書けないという…。



**説明プリーズ。なんだか不穏ですね。（前書き）**

内容を大幅変更しました。今までの内容を楽しんでくださったっていた方々には申し訳ありませんが、どうしても話の展開に無理があるので、こうなりました。ご了承ください。時期を見まして、このまえがきは削除します。

## 説明プリーズ。なんだか不穩ですね。

あれから、数日。今では、あんな襲撃や化け物など夢としか思えない。だが。ふと隣を見る。黒髪に赤い目、目鼻立ちの整った美青年と言つて差し支えない彼の存在が、その記憶が本当だと訴えてくる。

「どした」

「なんでもないわよー」

彼は、竜と呼ばれる存在だ。ルー自身、彼が人と同じ姿をしているからか、そのことは半信半疑ではあるが、あのとき化け物を倒したのは彼自身である。異形の姿となつたあの腕は、記憶に新しい。家の屋根に届きそうなほど大きな化け物を一瞬で倒せるほどの強さを秘めたあれ。なんでも、竜というのは、そこの化け物や妖怪よりもよっぽど強いらしい。

そんな神にも名前が見え隠れする竜が、なぜ平凡な彼女のそばにいるのか。

彼女が、今まで、妖怪や幽霊の類を見たことがあるかと言つたら、答えはノーだ。超能力やなにやらを持つているかと言つたら、それもノーだ。妖怪とか超常現象に対する興味は人並み程度しかなく、容姿も十人並み、身体能力はやや落ちこぼれ気味、専攻は就職活動にあまり役立たない日本文学。持っている資格は、漢検に秘書検定ぐらいだ。正直、これでは就職活動においてかなり弱い気がしてならない。それだけの、まあどこにでもいる人物、それが逆代琉華さかしりゅうかだつた。しいて特徴をあげるなら、珍しい氏名のため、他人に名前を覚えてもらいやすいぐらいだろうか。

だが、彼は、真と名付けた竜は、ルーの傍らしんにいる。なんでも、竜といつても別世界から来るらしく、ここに来る際に力がセーブされてしまう。そのセーブを解放できるのが躁竜者リネリアと呼ばれる存在だ。それがルーなのだと言った。

ぶっちゃけ、そんな力の片鱗のようなものは一切感じてないし、彼と出会って躁竜者として契約させられても妖怪や幽霊が見えるようにはならなかったし、魔法のようなものが使えるわけじゃない。彼女は、それも半信半疑だった。

「あ、その本とって」

「えー」

「いいじゃない、私じゃ届かないの。ほら、さっさと取る」

渋々といった感じで最上段にある分厚い本を取り出して、渡してくる真。どすん、と少々乱暴に手渡され、ルーは、慌てて両足を踏ん張った。

「……つまらない？」

「圧迫感があんだよ。あいつの仕事部屋みたいでヤダね」

「だったら、ついてこなきゃよかったのに」

心底嫌そうに顔をしかめた彼に、呆れ気味にルーが言うのは当たり前りの反応だろう。だが、真は、不思議そうに言った。

「離れたら喰われんぞ、お前。それでもいいのかよ」

「喰われ……って」

「妖怪とか化け物とか。躁竜者ってのは、大概美味いって噂があるし、竜を降くだすのに使える存在だ。なんといつても、俺たちはお前らがないとなんもできねえからな」

あのときの判断、早まったかしら…。いやでも、半強制的に流されるようにいつのまにやら躁竜者になってたんだから、恨むのは榊原さんねそうだきつとそうに違いない。後で料理に苦手なたまねぎ入れてやるう。そう決意したのだった。そうして、ふと気づく。

「そういえば、家に来たのもそれが理由なの？」

「まあな。半分は棲んでる場所が崩壊して穢れを浄化する必要があるってのもあるけど」

「せ、説明プリーズ」

半分以上も理解できなかった。今度は、真が呆れた表情で説明を始める。

「……わかったよ。俺と樹は、神社とそこに隣接してる居住スペースに住んでる。そんで、人間が妖怪って呼んでるやつらは、陰の存在。その死体が置かれた場所は、それから出た瘴気っついか、なんつーか嫌なものが溜まんだよ」

「嫌なものってことは、放射線とか毒ガスみたいに体に悪い影響でもあるの？」

「そーだよ。だから、土地が自浄するまで待つしかねえんだ。いくら力があるっつっても、俺は浄化できねえし」

「竜も万能じゃないのね…」

移動しながら会話し、勉強用に設置された机に座る。これは、一人掛けだ。それに集中したい。ルーは、そばのテーブルで本でも読んでほしいと言った。まあ道理だな、そうやって素直に本棚へ消える。

ふう、と溜息をつく。やっぱり美人のそばにいるのは慣れない。顔立ちがいいので、間近に迫ればどきまぎするし、そばにいるだけ

で周囲の視線を独り占めしてしまう。要は、気疲れだった。まあいい、集中しよう。目の前の書物に目を通し始めた。

ふと、騒がしいなと感じて、顔を上げた。騒ぎのもとに目をやれば、人だかり。それも色とりどりに派手な服装をした女子大生ばかりが何人も生垣を作っていた。いったい、中に何があるんだ。見回せば、周囲の視線もそこに集中している。迷惑そうなものも、羨ましそうなものも、陶然とした表情のものも、様々だ。

集中力が切れてしまった。時間を確認すれば、すでに三時間は経っている。だいぶ課題が進んだ、今日はこれで区切りとしよう。ルーは、そう思つて荷物を手に席を立つ。近くを通り過ぎるとき、ふと黒髪が見えた。ついで、意志の強い赤い瞳と視線がかち合う。

真、だった。騒ぎの元が連れだと知つて少々驚く。が、すぐに、そういえば、芸能人よりよっぽど美人だったと思ひ出した。

真は、無言で生垣を抜け出すと、むろん彼女たちはずついてきた。が、彼は、一切無視して、ルーに向かって手を出す。茫然としていれば、眉間に皺が寄り、持っていた分厚い書籍を奪われた。

「返すんだろ」

思わず視線で行動を追っていた彼女に気づいて、ぽつりと零す。そして、それは、元あった場所へ戻されたのだった。いいなー、私もああやって助けてほしい。てか、あの子誰よー。イケメン連れて羨ましい。後ろで取り巻きたちがきゃっきゃと話し出す。

「わっ」  
「行くぞ」

気付けば、腕をつかまれていた。不機嫌そうに後ろの女子大生たちを一瞥して、（そこで歓声があがって眉間の皺が増えたのは言うまでもない）大股で歩きだす。ルーは、引っ張られるままに足を進めた。

±±±

近くのカフェテリアで、昼食を食べているときだった。

「おっはよー」

言葉とともに、ぱしつと肩を叩かれる。飲んでいたジュースにむせながら、隣の席に移動してきた人物を見やる。肉感的な体つきに長く艶やかな黒髪をさらりと後ろに流し、涼しげな目元に泣き黒子、浅黒い肌でも、それを活かした服装をしていて、しつかり者の姉のような雰囲気みの女性。ルーの親友である、宮代沙夜みやしろだ。とても美人だが、現在恋人募集中である。

「お、おはよ、沙夜。今日は講義ないんじゃないかなかったの？」  
「まあね。珍しく休み、だっただけだ…」

そして、ちらりと横目で真を見る。もくもくとハンバーガーを頬張っている彼は、視線に一切答えず、ただファーストフードの独特な

風味を味わっていた。

「聞いたわよー、彼氏、できたんだって？」

「ごぶっ」

「やだ、ルー。大丈夫？」

「だ、大丈夫…：ていうか、どこからそんな噂を…」

ただ、図書館に一緒にいただけなんだけど。恋人の素振りもなにもなかったと思えばルーだが、残念ながら人間は異性が二人仲良く一緒にいると恋仲を疑うものである。

沙夜も当然のように図書館で一緒にいたって騒いでた馬鹿がいたからと言った。彼女たちは、あれ彼氏？ 違うよね、でも彼氏だったらどうしょ。なんか仲良さげだったー。などと騒いでいたようだ。

「じゃ、とりあえず、これは彼氏じゃないと」

「そうよ。むしろ、知り合って数日よ」

「数日…：まあ、一目惚れじゃなかったら恋仲にはならないわね」

改めて、真を観察する沙夜。見惚れているわけじゃない、完全に観察だ。イケメンより平凡、と豪語する彼女らしい。

「綺麗な目ね。生物学的にこの色はありえないんだけど。カラコン

？」

「……」

「くおらー、無視んな。イケメンの分際で」

それ褒め言葉だよ…。そう言えないルーだった。目の色から、いきなり人外というワードにまで、考えが飛躍するはずがないのだが、彼女は美人なのに恋人がいない、というか友達も意外と少なかったりする。それは、彼女がちょっと変わってるからだ。

気になつたら追及する性分だ。仕方ない、別の話題を持たせよう。

「そついえばさ、聞いた？ あそこの丘の上の神社に変事があつたらしいって」

「知ってるわ。数日前、謎の発光があつたんでしょ。行つてみたら、嵐もなにもなかつたのに、木が何本も引き倒されてたって」

「そ、そうなの…そこまでは知らなかつた」

「きつと妖怪の仕業ね！」

オカルトマニアなのだ。ゲーマーでもある。ある種のオタクと言つて差し支えない。彼女は、原因と判断した妖怪について話し始めた。目を輝かせて熱弁をふるう。正直、普通の男には扱いにくいことこの上ない。彼女の希望である平凡なら、なおさらだ。

「でね、絶対、もつふもふよ。あー、触りたい！ ケセラランパサラン」

何語だろう。疑問に思つても口にしない。それが彼女と上手に付き合つ方法だ。

「あ、そうだ。私、ルーにこれ話しに来たんだった」

ふいに、熱弁が止まり、彼女は、鞆を探る。出てきたのは、綺麗な組木細工の小さな箱。漆の塗られた、とてもきれいな箱だ。

「すごい綺麗ね」

「でしょう、これはね、木のパズルなのよ。パズルを解いたら箱を開けられるってわけ」

確かに、様々な細工が施されていて、透かし彫りとなつた箇所が



動かせるようになっていた。複雑な形の穴に、模様をいくつか動かしてはめ込むのだろう。

手を伸ばして触ろうとしたとき、ぱしっと破裂音がして箱が飛んでいった。真が振り払ったのだ。

「な、なにをするの！ 壊れたら…」

「触るな」

「え…」

鋭い眼光で射竦められる。びくりと身体が震えた。

「あれには、触るな。お前も元の場所に戻しておけ。そのとき、剥がしたのも、全てだ」

茫然としていた沙夜にも、厳しい視線を投げかける。はっと我に返り、慌てて木箱を取りに行った。彼女が席に戻っても、真は動く気配も言い訳する気配もない。一体何事なのか。

その後、昼食は気まづいまま終わり、ルーは、真に引きずられるようにして帰っていった。

説明プリーズ。なんだか不穏ですね。（後書き）

この時点で、なんの話か気づいた方は2ちゃんねらーではないでしょうか。

騒動が、こつちめがけて突っ込んでくるようです。

なんで分かったんだろう。親友と別れたあと、電車の中で、手のひらサイズの箱を撫でながら考える。

確かに、これは、沙夜の実家の蔵から出してきたものだ。物々しい雰囲気です。鎮座するあそこを探検するのは、とても楽しかった。いくつか使えるものがあるかもしれない、そう思ってもいた。蔵の最奥、それも棚の後ろに隠すようにして落ちていた。叩きの柄を使って、なんとか手が届く位置にまで出したとき、何かが剥がれるような音もした。手にした木箱にくっついていた紙切れを剥がすこともした。だが、それは、彼女一人で行ったものだ。両親も祖父もいなかった。

それなのに。なぜ。

あの宝石のような赤い目を思い出す。きつく睨む眼光は、肉食獣のように思われた。喰われるかと思っただけだった。

人間には天敵はいない。自然災害が唯一の天敵かもしれないが、生物としては人間は頂点にあるといっても過言ではない。だが、あれは喰う目をしていて。人間が久しく忘れていた狩られる側の恐怖。確実にそれが背中を掠めた。

かちり

「まあ、明日ぐらいに行こうかな」

実家は、遠い。帰っていたのは、連休だったからだ。ついでに就職先も探していたが、まったく成果は上がりず仕舞いだった。そう結論づけて、彼女は立ち上がった。電車の扉を潜って、ホームに降りる。かつかつとヒールの音を響かせて颯爽と歩いて行った。

「ちよっと、忘れ物」

親切的な女性の言葉も聞かずに。

±±±

テレビをつけて、夕食を頬張る。宣言通り、たまねぎをたっぷり使用したポトフやフライものなど嫌味なほど用意した。住居が崩壊し、躁竜者であるルーを守ることも目的のひとつとして、居候となった神主は、さつきから青い顔で料理をついついている。隣の真は、美味しそうにおかわりまで要求していた。なにか、俺に恨みでもあるの…とぼそりと零したが、それには答ええない。につこり笑って、ポトフを食べる。食べないと冷めますよ。そういった意味をこめてふと、真が、つまらないのかバラエティからチャンネルを変える。

瞬間、なんともいえない悪寒が体を駆け巡った。

『という具合に、被害が広がっており、現在、桂城線付近は通行禁止となっております。ちよっと、私も…』

表示されていたのは、近くの地下鉄の駅構内。止められた電車の車内に呻く人々の声がある。画面が切り替わって、女性アナウンサーが、顔面蒼白になりながらも口上を述べていく。どんどん顔色は悪くなり、青を通り越して紙のように白くなっていた。

「あの人、大丈夫かしら…」

ルーの言葉だけが、リビングに響く。今にも倒れそうなアナウンサーに、目が釘付けになる。と、急に視界が閉ざされた。抗議しても、手はしっかりと目を覆ったまま。樹たつき、チャンネル変える。わかった。そんなやりとりだけがくぐもって聞こえた。

ようやく手が外されたときには、ニュース番組ではなく、さっきまで見ていたつまらないバラエティになっていた。

「……見るな」

視線で疑問をぶつければ、たった一言だけ返される。昼食のときと同じ目だ。ひどく真剣で鋭い瞳。神主に視線をやっても、同じように否定されるだけだった。

「ごめん。話すことはできない。だけど、やめてくれ」

彼の手の中で、リモコンがみしりと不穏な音を立てた。

ちやぶん、と湯につかる。程よい温度は、疲れた体にとても心地よかった。

なんだったんだらう。わからないことだらけだ。

今日見たニュースも、あの箱も。なぜ触ってはいけないのか。なぜ見てはいけないのか。説明もできないと言っていた。

かと言って、あの事故に関わらないということはできない。あの路線は、彼女が大学へ行く際に使う路線だからだ。もちろん、しばらくは封鎖されてしまっただらう。大学のHPをチェックしなければ。ああ、面倒くさい。

「はあ…」

あんまり入っているとのぼせそうだ。もくもくと漂う湯気を目で追いながら、立ち上がる。と。

壺。箱。綺麗な細工物。けれど、なんだか禍々しい。近寄ってはいけない。蓋が開いている。端からなにかが溢れている。なんだ、あれは。見たことがない。いや、見たことはある。けれど信じられない量だ。近づいてくる。嫌だ。中は見たくない。一步一步。だめだ、止まらない。どんどん溢れてくる何か。だんだんと近づいてくる壺。笑い声が無数に響いている。遠く近く。揺れながらだんだん囲まれていく。怖い。引き寄せようとしている。奥へ奥へと呼んでいる。呼ばれている、呼ばれている。

「ルーッ！」

乾いた音がした。目の前に端正な顔がある。黒髪に赤い目。真だ。眉根を寄せ、心配そうにしている。視線があつと、問いたですように質問された。

「呼ばれていたな」

「え…な、に…」

「…見たんだろう、箱を」

箱。綺麗な箱。木製の細工物。今日、友達が持ってきた箱。そうだ、あの箱じゃないか。呼んでいたのは。

「見つかってたってことか…」

ぎり、と歯を食いしばる。険しい表情で、後回しにするんじゃないかと呟く。湯気のせいで、彼の髪はしっとりと濡れていた。湯気？ ふと、ルーの思考が止まる。

「変態                    ツ！」

ぶるぶると震える神主の視線の先には、漫画のように、手形に赤く腫れた頬。必死にこらえているが、目が笑っている。そして、抑えきれずに声が漏れている。

「……笑うな」

「ぶはっ」

あひゃひゃひゃ、と盛大に笑い始める。腹を抱えて机をばんばん叩いて、大笑いだ。視線は、頬と目とを行ったり来たり。腹が立つてきた真は、テーブルの下で報復をすることにした。

「出たよー」

ほかほかと湯気をたてて寝巻に着替えたルーが出てきた。今度は、痛みに悶える神主に胡乱げな視線をやって、彼女は、真から、少し離れた位置に座る。おい、と声をかければ、変態としか返ってこない。

真としては、躁竜者の危機を救ったのだから褒めてほしいくらい

なのだが、彼女は、怒ったままだ。怒りを解きたくとも、いかなせん彼女がなんで怒っているのかもいまいちわからない。

まあいい、わからなければ聞けばいいだけだ。これまでもそうやって解決してきたし、これからもそうするつもりだ。

「ル」

「なに」

「…さっき倒れかけたとき、箱を見たんだよな」

やっぱり、後にしよう。そして、本題へ戻る。真の問いかけに、彼女は肯定を返した。細かく内容を伝える。

女、子供の声が出たこと。組木細工の箱が開いていたこと。その箱は、昼間、友達が見せてくれた箱で、真に触るなと言われていたこと。中身はわからなかったが、とても恐ろしいと感じたこと。引き込まれそうになったこと。

「それは、コトリバコかもしれないな」

いつのまにやら復活していた樹の言葉。

コトリバコ。漢字で表記すると、子取箱。箱を開けた相手の子孫を根絶やしにすることから名付けられた。主に地方の集落などで多く作られていたと聞く。中には、死んだ子供の指や、殺された女の髪など、悲惨な死に方をした女子供の遺体の一部が入れられ、その怨念が箱の中で大きくなっていく。

その箱を開けた相手の子孫が根絶やしになるたびに、呪いの力も強まっていく。

「人間で作られた蠱毒のようなものか」

「そうだね。それが一番近い」



ただ、今回はどうもそれとは一線を画している。ルーは、箱を開けていない。それどころか、触ってもいないのだ。

「なにか、手を加えられたものか、別物なのか…」

考え込んだ三人の耳に、インターフォンの音が届いた。

騒動が、こつちめがけて突っ込んでくるようです。（後書き）

内容追加。今回の題材は、洒落怖で有名な話をもじっています。もちろんオリジナルの部分もあります。フィクションですよ。20111017改変。ごぶれしましたの意味がわからない可能性に気が付きました…え、方言…。なので、だいたい同じ意味を持つ言葉と入れ替えました。東海地方の方言のようで、「ごぶれしました」  
「お風呂出ました。温かい風呂をありがとう」という意味です。だいたい。

怪しいお店から、箱へ行きます。

インターフォンに出たのは、神主だった。そろそろ来るころだと思っただよね、と言いながら玄関に向かう。逆代家に居候していることを触れ回ったのか、神主の客のようだった。

空気が崩れ、ルーは考えても仕方ないとテレビをつける。教育番組が流れ、右上の数字に、こんな時間に客なんて近所に迷惑じゃないと呟いた。

数分後。

玄関先で何か交渉していたらしい彼が、客を引き連れて戻ってきた。ルーは、寝巻姿にも等しい部屋着だったことに気付いて慌てるも、ダイニングの扉は開いてしまう。

「あ、悪いけど逆代さん引つ込まないでね」

そして、先手を打たれ、泣く泣くお茶の準備に取りかかった。

入ってきたのは、黒のスーツを纏った三人。頭角らしい一人がソファに座り、残りの二人は壁際で威圧するように立つ。神主は、向かいに座り、隣は真だ。彼らは、慣れるのか、黒スーツたちが入ってきても平然としていたが、ルーはそうもいかない。こんな夜中にいったい何の用だろう。夜の訪問者としては随分と上背があり、ただ話すだけでも威圧感を与えられる。もちろん、何かわけありの客人としか思えなかった。とにかく、お茶を用意してそれぞれの席の前へ置く。お構いなく、と客は、優しいな笑みを浮かべた。引き留められた手前、ルーは、真から少し離れた位置にあるソファに座った。それにぴくりと反応して困ったように眉を寄せたのは言うま

でもない。

話し出す前に、男が、ちらりとこちらを一瞥すると、神主が後にしると合図をした。

「ひとまず、話を聞く意志を見せてくれてありがとうございます」

「まあ、お世話になってますし、内容も見当がつきますから」

「以前は門前払いされたけど」

「ですが、それは、あなた方の力で十分解決したでしょう」

「そうですねえ。あの後そちらが引き受けてくださらなかったお陰で、だいぶ大変でしたが、なんとかなりましたよ」

なんだろう、嫌みの応酬にしか聞こえない。どういった客なんだ。しかし、ちらと二人の様子を見れば当然のように対応していて日常茶飯事だったらしく気にしていないようだ。

「さて、本題ですが。今、話題になっている地下鉄の事件をご存知ですか」

先程テレビで流れていた、人々が倒れ呻いている姿を思い出す。二人に情報を遮断されていたせいで、詳しくは知らないが、女性ばかりが亡くなっているところこのネット記事で騒がれていた。後で聞いたが、あれは「知る」ことで影響を与えるもの。だから、二人はあまり知らせないようにと配慮した。だが、ルーは、すでに影響を受けている。今のところ、あの事件のように被害者にはなっていないものの、今後どうなるかはわからない。

ふと青白くなっていく女性アナウンサーも浮かんで、知らず口を噛んだ。ぽむぽむ。ふと人の気配がして、暖かい手が頭を数回撫でる。隣を見れば、ソファから少し身を乗り出す真の姿が見えた。一瞬だけ彼と目が合う。心配の色を乗せた赤は、暖かかった。

「…早急に、あれの原因を突き止め、排除していただきたい。無論、報酬は出る。詳細はこちらの紙に書いておいた」

書類を手渡され、神主は、いくつかの項目に目を通す。見終わると隣の真に渡した。

「こちらの見立て通りの結果でしたら、明日には騒ぎは収まるでしょう」

「それは、有り難い。説明をお願いしますか？」

「わかりました。この話は、対応策を伝えておくべきでしょうから」

神主が、こちらを一瞥する。その視線の意味が分からないまま、彼の顔を見ていると、神主は、彼女は今回の事件の関係者ですと言い出した。

「今回の原因は、子取り箱だと思われれます。もしくは、その類似品です」

「コトリバコ…聞いたことのないものですね」

「そうですね。伝承としてしか存在が伝えられていませんから。私もあれがなければ存在を疑っていたと思います」

神主・榊原樹が知ったきっかけは、父。榊原伸治に持ちかけられたひとつの妙な葬式だった。神社でも葬式を執り行うことがある。一般的に知られた葬式の様子とは異なっているが、幼いころから神社の様子を知っていた彼は、違和感をもつことはなかった。だが、そのときばかりは、異様に思われたと言う。というのも、葬列に参加しているのは男性ばかりなのだ。女性、子供がいない。たとえば、たまたま親族が独身ばかりだとしても、今回の葬式は、一族の長である女性が亡くなったため、今後の相談も含め、全員が集まるように呼びかけられたと聞いている。もちろん、血族なら誰でもだ。

ふと、樹少年は、臭いを感じる。独特な、鉄臭い、本能で拒否反応を覚えるような類のもの。臭いの元をたどれば、部屋の隅に女性が箱を抱えて座っている。組木細工のそれは、とても美しく、だが恐ろしかった。後に、それが件のコトリバコで、彼女はそれに囚われかけていたのだ。

「解決したのは、父の友人でも霊力の強い人でした。私も子供だったので、あの箱に誘われたのですが、彼が止めてくれたので事なきを得ました。ただ、彼があれば破壊するときに一瞬だけ見えた景色を今でも覚えています」

それが、ルーが見たあれと同じものだったという。綺麗な箱、ざわめく周りの声、闇の中から誘う何か、言い知れない恐怖。すべてが終わった後に箱が子取り箱であること、その特徴などを教えてもらったらしい。だから、ルーがあれを語ったときに正体がわかったのだ。地下鉄の話もだけど、今日あったことを炎瑯に聞いたからね。ぼそりと彼女にだけ伝わるように呟いた。どうやら、男に知られたくないことのようにだ。

「なるほど…触れたものを、特に女子供をとり殺す箱、ということですね。ということは、それが地下鉄に…」

「はい、おそらくは。ですが、今回は、私の記憶の中のものよりもよほど強力に見えます。「知る」だけで影響を与えるかもしれません」

「わかりました。その点はお任せください。そちらは、箱の除去をお願いしますよ」

はい、お引き受けします。神主は、にっこりと笑って言った。ふと、男と目が合う。にっこりと柔らかな笑みを浮かべ、会釈してくるので、どうもと返事をした。男は、険しくなった竜の視線にも飄々

として受け流し、神主を通すことなく自己紹介を始めた。

「この件の関係者、と言っていました。この商談に立ち会うということは、頼承軒らいしょうけんの新しい店員になるんでしょうね。これからよろしくお願いします。私は、黒田と申します」

「あ、…こちらこそはじめまして。この家の家主の逆代琉華さかしろりゅうかと申します」

どうということ、と視線だけで彼に問いかける。神主は、ちょっと説明入りますね、とだけ返してルーに説明をし始めた。

曰く。頼承軒というのは、神主と真が始めた「何でも屋」で、頼まれれば犬の散歩から要人の警護まで様々なレベルのものに対応する。彼らが得意としているのは、心霊関係の要請。これは、竜が力の強い妖怪のような存在だからこそ対応できるものだろう。男に聞かれたくないのか、ぽそぽそと耳元で伝えられたのだが、躁竜者というのは大概そいつた心霊関係のトラブルに巻き込まれることが多いらしく、パートナーを探すために始めたらしい。もちろん、これからもやっていくつもりだろう。というのも、今まで得た信頼をなくすには惜しいし、この仕事で得られるものは何かと便利な情報をもたらしてくれるはずだと伝えてくれた。

「というわけで、逆代さんは躁竜者ソウリョウシャだし、お手伝いよろしくね」  
「…わかったわ」

躁竜者は、竜とともにあってこそ機能するもの。単体では、単なる妖怪の餌にしかならない。それに、関わりたくなくても目立つ存在らしく、どこからともなく妖怪や化け物たちに襲われるはめになる。そうなれば、パートナーである真のそばを離れるわけにはいかないし、必要だと言われてしまえば仕事から逃れられるわけもない。

「では、改めまして。よろしく願います。逆代さん」  
「よろしく願います」

丁寧な対応に慌てて礼を返したルーだった。

一週間後。二人は、地下鉄を歩いていた。桂城線は、封鎖され全く使えないものの、他の線路は毎日人間のために走っている。そのため、女性の姿は若干少ないものの、いつも通り人がごった返していた。

「すぐ近くで事件が発生してんのに、鈍いもんだな」

「いくら謎の事件があっても、報道されなければ別世界だもの。閉鎖されて多少不便になった程度だわ」

「知る」ことが影響を与える一つの手段だと判断されたため、地下鉄に関する報道がすべて規制されることとなった。マスコミは、渋々ながら別の報道に切り替え、今では地下鉄の話は「ああそんな事件あったねえ」程度の認識にまで落ちている。ただ、それが幸いしたらしく「知る」ことのなくなった箱の話は、これ以上被害を出すことなくとどまっている。大勢の人間が微細とはいえ影響下にある状態で、箱を壊すことは、何かあるかわからないので、この状態になってから決行することになったのだ。

人間つてのは、便利だな。真がしみじみと言って、角を曲がる。竜は、人間と違って忘れられないのかしら。ファンタジーにあまり興味のない彼女には、その答えは出ない。



「そういえば、沙夜のことなんだけど」

名前を言っても顔をしかめるだけだったので、仕方なく身体的特徴を告げる。ようやくわかったような顔に見えたので、話を続けることにした。

「神主…えと榊原さん？ あの人が保護してくれるって言ってたけど、大丈夫なの？」

「樹は、管理者…つまり管理者だ。心配することたねえよ」

「管理者…？」

「……今、答えても、頭の悪いあなたには理解できねえな。そのうち実物を見せてやる」

彼は、そう言ったきり、その話題には触れなかった。人間としての価値観を持つルーに説明するのは、面倒だと感じたからだろう。若干、馬鹿にされたような気もする。でも、大抵の人間がそうなるはずだ。わたしが例外じゃない。そこまで能力を求めないでほしいもんだわ。竜とかいう幻の世界に身を置いていた貴方とは違うのよ。彼の言うとおりに受け入れづらいだろうことは理解していたが、それでもやっぱり聞き逃せなかったのだ。胸中でそれだけ文句を言う、ふいに見られていると感じた。

なんだろう、と見回して、さっきまでいなかった影を見つける。それは、店の外装の影からじつとこちらを見つめていた。背丈からして小さな子供。小学生ぐらいだろうか。今度は、別の方向から視線を感じて、首をめぐらす。視界の端に映ったのは、女性らしきシルエツト。今度は、左。俯いた、けれどとても強い視線を感じる女性。斜め後ろ。子供のような、なのに、どこか歪いびつな。斜め前方。左後ろ。その通路の曲がった先。気づけば、何帛何千という視線のただなかにいた。見回せば、視界の中心には映らないのに、端に引っかかるようにして姿が見られる。奇妙な現象。ただ、見られてい

る。肌が粟立った。

ルーの妙な様子に気付いた真が、鋭くあたりを一瞥する。そこかしこにある、独特な暗闇の気配。隣の女性を狙うように視線をよこす。

「気づいたようだな」

一歩前に出ていた真は、そう呟くと、相棒の身体を抱き寄せた。

## 子取り箱（前書き）

残酷描写がちよびつと入ります。

## 子取り箱

闇を纏った視線に、軽く恐慌状態となっていたルーは、そのぬくもりにハッと正気付いた。様子の変化に気付いた彼は、無言で頭を撫で、彼女の耳元で囁く。

『エンカシヨウレン我が炎は滅する焰なり』

呟きが無数の小さな炎となり、周りを取り囲む闇を被う。ざわざわとした闇の視線がすべて消え去った。炎。確かに、彼の言葉が燃え上がったように広がった。

「さっきの…」

「破壊する炎。それが俺の能力だ」

小さいやつなら、あんたの守歌がなくても出せる。そう言っただけに、かざした彼の手には小さな炎が灯った。掌に収まる程度の赤い炎が、宙に浮いて煌々と燃えている。物理法則をすべて無視したようなそれに、思わずルーは感嘆の声をあげた。どーなってるの…。茫然と零せば、知らんと返される。人間が考え出した法則の原理などは、竜にとってはどうでもいいということなのだろう。

「能力…って、契約したら出せるようになる本来の力、だっただけ」

首肯する様子を見て、記憶違いはなかったかと安堵する。彼が、炎を操るということは、火竜なのだろう。竜について詳しくは知らないが、一般的なドラゴンのイメージと一致するので、理解しやすい。

「つていうか、守歌って…？」

「躁竜者が使える術みたいなもんだ。契約した竜の能力を制御コントロールできる。竜は制御下におかれるから、守歌なしでは自由に能力を使えない。まあ、あんたの場合は、炎だな」

「ええっ」

あんな風に自由自在に炎を操れるようになるのか。あれなら、マツチいらすでも便利ではないか。そこまで考えて、どうやって操るのかわからないことに気付く。視線を向ければ、非常に簡潔に答えられた。

「イメージして言葉にしろ」

「そんな無茶な」

ゲームをあまりやらない自分にとって、炎とはガスコンロやストーブ、たき火の火など、あまり恐怖を感じさせない姿だ。というか、自分や彼の手足から炎が飛び出るとは考えにくい。つくづく想像力が貧相なことばかりだ。

このまま話していても埒があかない。とにかく箱へ進むことにした。

箱へ近づくほど、感じる暗闇は大きく濃くなっていき、それにつれて影も増えていった。箱へと誘うような囁き声も聞こえ始める。だんだんとその声は増えていき、今では合唱に近いほどになっている。そこまで行くと、傍らの真の腕を抱き込んで離すことはできなくなっていた。

「ちっ」

隣で舌打ちが聞こえたかと思うと、すごい力で引つ張られた。一瞬の浮遊感。足が地面についたらしい衝撃のあと、わけのわからないまま視界が反転した。地面が見えると思つてすぐにそれが後ろへ流れていく。

気づけば、真に俵のように抱えられていた。視界が目まぐるしく変わり、視界の中央にとらえたそれを見て、彼が走っていることに思い至る。短い悲鳴を喉で押し殺し、近づいてくるその姿から視線を外せない。

影が何重にも重なつたような重たい色。ぐにやぐにやと揺れて変わつていく形。真っ黒のスライムのようなそれに、ところどころからのびた手のようなもの。関節などなさそうなそれらがゆらゆら揺れながら追つてくる。スライム自体の動きは遅いのに、手だけが追つてくる。体を感じる圧力に、息が上がる。抱えている人間のことを一切考えずに走っているからだろう。

恐怖と息苦しき。いつまで続くのかと思われたそれは、唐突に終わった。

「囲まれたな」

中心部まで来たつてのに。そう呟きながら抱えていた相棒を下す。無理な体勢から解放され、一息ついた彼女は、あたりを見回して絶句した。

黒い。

そして、どこか生臭い匂いがする。鼻をつくような不快感をあおるそれに、思わず咳き込んだ。

ふと視界の端に映る何かに気付いた。

「見るなよ。取り込まれるぞ」

殺されるのは、女子供ばかり。塞がれた視界とともにそんな言葉が頭をよぎる。

声が喉に絡まった。呼吸が浅く早くなっていく。そういえば、さつきから誰かの笑い声がする。囁くようなそれは、どこから聞こえているのか。いや、どこからでもなのか。幾重にも交わりあった不協和音。どうしよう。どうすれば。

ぼん。

ふいに温かい手が頭を撫でた。すぐにそれが隣にいた真だと分かる。

「呑まれるな。俺がいるだろう」

「……うん」

一瞬で落ち着いた。彼の低い声が、安心していいのだと伝えてくる。頼れる温もり。彼は、こういった戦闘を何度も経験していると聞いた。

「さつきも言ったな？ 俺は炎だと」

「え、ええ…そうね」

目隠しをされたまま、会話を続ける。知ってはいけないからだろう。姿を見るだけでも影響力はあるのだ。彼は、説明を始めた。

「戦うときに必要なことは、怖いと思うことを忘れずにそれを克服することだ。まあ、いますぐには無理だろうから、恐怖を意識しないようにしておけ」

「わかった」

「よし。護摩炊きって知ってるか？」

恐怖を意識しないためなのか、彼は、普通に会話を続けるように

質問を投げかけた。こんなのにんびりと会話していいのだろうか、と気になっっているが、目から入る情報が一切ない状態のルーにとって、今どうなっているか知るすべはない。平坦で冷静な声を聞いている限り、あまり切羽詰まったものではないことだけしかわからない。

護摩炊き。お札などを特別に組んだ木組みの中で燃やしご祈祷する。詳しくは知らないが、そんなイメージだけはぱつと浮かぶ。だが、それがどうしたというのだ。素直にそれを聞けば、隣の彼が笑う気配。

「そうか。あれはな、厄を落としてんだ。つまり浄化してんだよ。

…で、俺は火竜だ」

「…できるの？」

「当然」

あとは、お前が守歌を使うだけだ。不敵に笑ったように感じて、改めてその言葉に集中する。

守歌。言葉。竜の力を制御するもの。言葉だ。自分が知っている言葉。死にたくない。箱なんかに殺されたくない。対抗策が一切ないわけじゃない。隣にいるのはなんだ？ 竜。化け物の中でも神様のように強い。というより竜といえば水神様だ。ドラゴンのイメージが強かったから気付かなかったけど。

竜は、守護神なのよ。仏教では仏法護持の神とされているの。

オカルトマニアの親友の言葉が蘇る。竜は、それぞれの動物の優れたところを集めて作られた理想の怪物。恐ろしいもの。でも、力の象徴でもある。そして、護る者。西洋では金銀財宝を守り、東洋では仏法を守る。神様の末席に連なる者。守るもの。このままこの箱が放置されればどうなるだろう？ 私自身はもちろん、所有者である親友ももしかしたら影響下にあるのでは？ 怖い。怖くて連絡がとれなかった。死にたくない。こんな方法で死んでしまったら、



天国には行けない気がする。死にたくない。個人的な欲望だけど、死にたくない。親友も死なせたくない。彼女は、とても心地いいのだ。死んでほしくない。ずっと一緒にいてほしい。隣にいる彼も。出会って数週間。それだけでも、濃密な時間だった。上から目線で横柄な態度だけど、どこか優しいところもある。さつきも守ってくれた。諭してくれた。混乱しないように怖がらないように、今も目を塞いでくれている。

だから。

『フテッシエ・フラメ  
護りたい!』

今、何を言った？

ただ、つらつらと考えているままに感情のままに叫んだ。それなのに、口をついて出た声は、よくわからない言語のもの。そして、ふと頬に熱を感じて顔をあげた。

え。茫然としているうちに言葉が漏れた。目の前の光景。いつのまにか、目隠しは外されたらしい。それは、赤く燃え上がる炎が縄のように小さな箱に巻きついている光景。耳の近くで炎が酸素を吸い込む音がして、自分を守るようにして薄い炎のような壁が周りを取り囲んでいたことに気付いた。

「烈火か…ずいぶん強いやつ唱えてくれたな」

呆れたような声に慌てて隣に立つ真を見る。彼の手からのびた炎。黄色く鮮やかに輝くそれは、激しく揺れて燃えていた。二人の周囲に展開された炎の熱を受けて、周りの闇が悲鳴をあげて後退していく。箱が本体なのか、それらは箱へ向かっていた。

その様子を見て、真の赤目が細められる。手に力がこめられた。瞬時にそこから炎が爆発的に広がり怪物がたどり着く前に爆発を起こす。爆風に乗せられて嫌な臭いが鼻を襲う。腐った肉。箱の中に

入っていた遺体の一部が焼けているのだろう。木箱が燃え、天に向かつて炎が伸びていく様は、彼が言っていた護摩炊きと同じ光景に見えた。

先ほど叫んだ知らないはずの言語。それと同時に起こった炎の縄と壁。それらがすべて自身が起こしたこと、らしい。というのも実感があまりわからないからだ。いつのまにか晴れた闇によって、景色はいつもの地下鉄と変わらない。その中にぼつんと存在する燃えカス。木箱を焼き尽くすと同時に周りに展開していた炎の壁も消えた。だから、さっきまでの超常現象は、数メートル先にある燃えカスぐらいでしか証明されない。

「終わったな」

意外と簡単だったな。そう言いながら隣で軽く伸びをして、肩を回す。緊張感がなくなつたその姿を目にして、ルーはようやくすべての恐怖が終わつたことを悟つた。そうだね。無意識のうちに気のない返事をする。体感しているときは長く感じていたが、終わつてしまえば意外と短かつたような気がする。緊張から解放され、ルーは、ただただ茫然としていた。それを横目で見て、彼の口元が綻ぶ。

「変な顔」

「そうだね……って、変な顔ってどういう意味!？」

本当に可笑しそうに呟かれた言葉に、数秒遅れて反応した。茫然自失といった状態から抜け出したらしい。きつと睨んでくる相棒。

「馬鹿っぽい顔って意味だな」

聞かれたままに答えれば、彼女の眉間に皺が増える。ここ数週間の付き合いで彼女の性格を理解してきた真は、拳が飛んでくる前に逃げることにした。多少離れても問題ないだろう。彼女が怒って追いかけてくるのは明白だ。

## 子取り箱（後書き）

怖い怖いとか言ってるけどあんまり怖がってない気もする。最後がバカップルぽいけど、違いますよー。

ひと段落したけど、次が不安でたまりませんね。

子取り箱と呼ばれる怪異の事件が収まってから数日。

その後、ルーが真を殴る前にやってきた黒服たちによって、子取り箱の灰は回収された。研究に使えないかと思っただけだが、後からやってきた樹に「持って帰ってもいいけど、死人が出るよ」と断定され、しぶしぶ神主に渡していた。結局、樹が処理したと聞く。そして、テレビや新聞で、地下鉄の安全運転の検査のため、しばらく封鎖していた桂城線が通常運営に戻ったと報道された。今では、誰もが違和感なく使っている。死人も出たと言われた事件だが、先日、犯人とされる男が逮捕され、地下鉄で起きた不可解な事件は、すべて明瞭に解決された。死因は、犯人がしこんだ毒物とされている。

「でたらめだけど、世間一般では、これが真実なのねえ」

しみじみと呟く。一日だけ一面記事となったその事件の嘘の報道を眺めて、コーヒーを飲む。隣で静かにコーヒーを眺めていた…もとい猫舌なので冷ましていた樹がそれに応じる。

「彼らの仕事は、社会を潰さないことだからね。多少の嘘も多大な虚言も、必要なことなんだよ」

あの黒田と名乗った人が率いているらしいあの集団は、どうやら社会に多大な影響力を持っているようだ。事件の最中、ネットやテレビなどで情報が減っていく様子を見ていても思ったことなのだが、今回の一言で一層確信した。テレビの中での存在だと思っただけけれど、裏組織って。そんなことを考えながら、私もこれが真実でよかったけどねと嫌味を一言。

「あはは、当事者にしちゃってごめんねー」

誠意が感じられない適当な言葉に、お昼はピーマン尽くしだと心に決める。かなり大変だったのだ。平凡な人生を送ってきた彼女にとって、衝撃が大きかったのは言うまでもない。

「ところで、守歌だけど。使えるようになったんだって？」

ようやく冷めたのかコーヒーを口にして、ぷはーと親父臭い仕草。顔はいいのに、非常に残念だ。

「それなんだけど…」

ラテツシエ・フラメ。その単語が意味するのは、守護する炎。おそらく、炎の壁を出し縄のようなもので敵を捕らえる。真曰く、高等術らしく、あのあと何度か練習でそれを唱えてみたのだが、一切できなかった。

守歌というものがよくわからないのは、真も同じらしい。

なんでできないんだろうな。不思議そうに首をかしげていた。ちなみに、あの名前が自身の技名と合致することから、技の名前を覚えれば使えるのではないかと思っただ真が、自分が使える技の名前をすべて伝えてくれたのだが、ほとんど利用できなかった。

唱えても唱えてもぼぼふんと漫画のような黒煙がどこからともなく立ち上るのみ。使用できた一部は、生活には役立つかもしれないというレベルで、真の掌に炎を出したり、熱を伴わない炎がゆらゆらと空中に浮かんだり、小さな炎が飛び出て壁紙を焦がした程度だった。

「まあ、守歌は精神が重要だからねえ」

あつはつはと遠慮なく笑った後、告げた樹。現状を話している途中で彼に最初から相談すればよかったんじゃないか…と思いはじめたルーは、やっぱりかと溜息をついた。

「だって、守歌は、竜の力をコントロールできるんだよ？ まったくの初心者プログラミングなんてできないのと同じで、大きな力を動かすためには修練が必要なんだ」

特に精神の、ね。人間は、科学に頼るようになってから魔法や術などを信じなくなった。また、社会の中で平凡に生きていく中では、精神を鍛える必要もなくなっていった。心が貧困になった彼らが、不思議な力を扱うためには、本気でその現象が起きると信じて強く願わなければならぬ。例えば、子取り箱を壊したときのように。

「それじゃあ、私は想像力豊かにならなきゃだめってことですか…」

「今すぐには無理だろうから、しばらくは危険な状態にならないと守歌は出てこないだろうね」

「え」

君って意外と頑固だからね。常識人ってこういうとき面倒くさいね。そう言ってくるということは、ルーの常識をひっくり返さない限り、守歌のマスターは無理だということだろう。そして、危険な状態にならない限り信じて使うことができない。

「ま、しばらく使っていれば慣れてくるからね。そこまで意識しなくても十分に使えるようになる。それまでの辛抱だね」

頑張れ と気のない応援は、ルーの左耳から右耳へと流れていった。

ひと段落したけど、次が不安でたまりませんね。（後書き）

とりあえず一章終わりです。長らく更新せず申し訳ありませんでした。今年は、もうちょっと頑張りたいです。あ、まだ続きます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7723s/>

---

紅の瞳

2012年1月10日02時45分発行